

発表 中田 裕子 ・ 朗読 松田 由美子

みずず書房ロマン・ロラン全集第 4 巻『ジャン・クリストフ』片山敏彦 訳「九、燃え立つ茂み」

【106 頁~124 頁】

*・生命へ復帰して以来、彼は生計を立てる方法を講じなければならなかった。この都市を離れ去ることは彼としてできないことだった。音楽の教授をして得る収入によってブラウン家に定期的に支払いをするまではクリストフとしては気持ちが落ち着けなかった。彼は革命主義的な無謀なふるまいをしたとの噂がひろがっていた。クリストフの音楽家としての名声とブラウンの奔走とによって四つか五つの家庭に教えに行くことになった。ブラウン家の生活は几帳面な規律にしたがってなされていた。午前各自が自分の仕事をする。ドクトルは往診にでかけ、クリストフは出稽古に行き、ブラウン夫人は市場へ買い物に出かけたり、慈善事業のために外出したりする。クリストフはブラウンより早い帰宅時間である。彼は若い妻と二人だけで食事をする。これが彼には少しも愉快でなかった。彼女は彼にそういう感じを持たせていることに気が付いていながら、それを改めようとする努力は少しもしなかった。彼女の方からクリストフに話しかけることは決してなかった。クリストフはパリ女たちの垢ぬけのした優美さを思い出しながら、アンナを眺めてこう思わずには居られなかった。——「なんてみにくいのだろう！」と。だがそれは正しい判断ではなかった。そしてまもなく彼は、アンナの髪、手、口の美しさに気がついた。彼は礼儀上自分の方から彼女に話しかけるように努めていた。話題を見つけるのが苦労だった。彼女のほうからそれを助力することは全くしないのだった。かねてからブラウンは、彼の妻にピアノのレッスンをしてくれとクリストフに頼んでいた。クリストフはアンナに何か弾いてみてくれるように言った。彼女の弾き方は、雅致がなかった。おどろくばかり無感動であり、機械的だった。どの楽譜も平等に取り扱われた。ページをめくるところへ来ると、楽句の途中であっても平気で弾きやめて少しも急がず、それから次のページの譜を再び弾くのだった。クリストフはあんまり腹立たしいために室から出ることによって辛うじて、非礼に陥るのを避けた。彼女はそれには平気で、冷静に曲の終わりまで弾き続けた。その練習ぶりは、同じ個所を五十回も飽きずに繰り返すというような冷然たる没趣味の頑張り強さによってであり、しかも感激をみじんも示さないものであった。夕食の後に三人でいっしょに居間にいた。ブラウンが懇願するのでクリストフはピ

アノを弾くことにした。夜が更けるまで弾いた。ブラウンは恍惚として傾聴した……少しも理解していない、もしくはとんでもない理解の仕方をしている……しかし、勘違いの感激の叫びを何度か聞かされると彼は弾くのをやめて自分の室へ上がっていった。ブラウンは思いめぐらしてみても原因を突きとめた。自分の音楽観に弱音気をつけた。新聞を読むか、居眠りするかして……室の奥に座っているアンナは、一言もしゃべらなかつた。膝の上に縫いかけたものを置いて、手仕事をしているふりをしていた。だが視線は固定しており、手は動いていなかった。どうかするとクリストフが弾いている最中にそっと室から出て行ってしまい、それきり姿を見せなかった。

*・日々がこんなにして過ぎて行った。肉体の健康は回復した。しかし精神の機械はやはり病んでいた。彼の孤独は深かった。ブラウンとは知性上の親密さを持つことができなかった。アンナとの関係は、朝晩の挨拶を取り交わす以上の物がほとんどなかった。音楽の生徒たちとの関係はむしろ反感であった。

朗読 1

・都市と、門閥と、協会とこれら三重の束縛に魂は押しつけられていた。表立たない一つの強制が人々の性格を圧縮していた。大抵の人々は子供の時から一数百年前から、それに服することに馴れていた。そしてその強制を健全なことと観ていた。町は己の客人たちに対して、距離を保っている、温かみのない好意を示した。彼は、心がむき出しになっているような、きわめて敏感な状態になっている折柄だった。至るところに利己主義と冷淡さを嗅ぎつけて、自己のうちへ閉じこもることになるのはその頃の彼としては自然な成り行きだった。

朗読 2

・或る思想と、それに反対の思想、ある行動とそれに反対の行動とは相次いで登場する。—それらの作用と反作用の継続は果てしなく繰り返される。音楽を作る仕事がもうクリストフには避難所にはならなかった。この仕事は継続的な、不規則な、当てどのないものになっていた。彼は芸術の空しさを——死滅の空無を充たし得ない、芸術の空しさを、あまりに強く感じていた。オリヴェが死んで以来、もう何ものも遺っていないかった。——何ものも。彼の生活を曾ては充たしていたすべてのものに彼ははげしい反発を感じた。—自分は一つのまやかしの夢に操られていた道具だったというように今では彼には思わ

れ、すべての社会生活は、言語がその原因である大きな誤解の上に立っているような気がした。

朗読3

*・或る晩クリストフがピアノを即興的に弾いていた時に、アンナは席を立てて出て行ったが、クリストフは気に留めなかった。彼は弾き続けた。急に、譜に書き取っておきたい気になったので、急いで自分の室へ必要な紙を取りに行った。隣室のドアを開けたとたんに、前かがみになって暗がりのなかへ急ぎ進んだ彼は、一つのからだに激しく突き当たった。彼女はつぶやき声で不明瞭な言い訳をした。別に気にも留めなかった。一時間ほどして彼は、夕食後の時をブラウンおよびアンナと共に過ごす小さなサロンへもどっていた。三人とも無言であった。断続的に雨の音がきこえた。

朗読4

*・この日以後クリストフはアンナに注目しはじめた。彼女は再び無口な彼女に戻り、冷淡さとそして仕事への猛烈な熱中へ戻り、その仕事ぶりの激しさは彼女の夫の気持ちをさえいらだたせるほどであったが、彼女自身はそれによって彼女の動揺している性質の奥からくる数々の突きとめがたい考えを眠らすことに努めていた。或る日彼女が化粧をしていたときにアルコールランプが破裂した。一瞬間アンナは火焰に包まれた。アンナは化粧用の外衣の留め金を外して、火がついて燃えだしているスカートを腰から脱ぎ落して、それを足で踏んづけた。アンナは椅子の上に立って、腕の出ている下着姿で燃えているカーテンの火を、落ちつき払って両手でもみ消しているのだった。クリストフは彼女の沈着なのに感心した。クリストフは疑った——いったい彼女には心というものがあるのかと。彼自身が自分の眼で見た一つの事実にもとづいて、もはやその疑いは解消した。アンナは一匹の黒い小さな雌犬を持っていたが、利口そうで柔和な眼のこの小犬は家じゅうで寵愛されていた。

朗読5

・十月の或る日に、クリストフはまたしてもアンナにびっくりさせられた。——町中が噂している或る情痴的な犯罪事件についてクリストフはブラウンと話し合っていた。田舎でイタリー人の二人の姉妹が同じ男に恋していた。一人の恋人を二人で分け持つ気にはどうしてもなれないので、むしろその恋人を殺してしまおうと相談を決めた。そのとおり実行された。二人の娘は主張するのだった。

朗読6